

コロナ禍における「昔のくらし学習」の取り組みについて

- 茨木市立文化財資料館の事例 -

青木 愛美

1. はじめに

令和2年度より、新型コロナウイルスの影響を受け、感染拡大防止対策として、茨木市立文化財資料館では団体見学の受け入れを中止している。そのため、学校連携行事を遠隔（オンライン）で行う必要が生じた。本稿では、令和2年度のコロナ禍の状況の中で実施した市内小学3年生を対象とした「昔のくらし学習」の取り組みについて紹介し、その取り組みのメリットおよびデメリットについて整理したい。あわせて、本館における民俗資料の保存についてどのような利点があったのかについて、簡単に紹介する。

2. コロナ禍における「昔のくらし学習」の取り組みについて

2.1. 取り組みの前提

茨木市立文化財資料館では、毎年1月から2月にかけて、市内小学3年生を対象に「昔のくらし学習」の取り組みを実施している。取り組みの目的は、100年から50年ほど前に使用されていた本館所蔵の民俗資料を使用し、当時の道具やくらしの様子について学習できる機会を設けることにする。具体的には、本館ロビーを展示会場とした「ちょっと昔の茨木」展の開催に加えて、研修室に触れる民具を用意して市内小学校からの団体見学を受け入れる、もしくは市内小学校に直接資料を運び、現地で学習を行う出前授業を実施していた。

しかし、新型コロナウイルスの影響を受け、令和2年度は団体の受け入れ、また本館ロビーでの展示が中止となった。「ちょっと昔の茨木」展では、団体見学の中でスタッフが付き添い、黒電話など一部資料に触れることを可能とし、昔の道具の使用方法を体験することを可能としていたが、接触を回避しなければならない新型コロナウイルスの状況下では実際に資料を見て、手に取って触ることは困難となった。

このような状況下のもと、令和2年度はZoom Cloud Meetingsを使用し、本館から市内小学校へ遠隔（オンライン）で授業を行うこととした。

2.2. 取り組みの事前準備

本館所蔵の民俗資料を用いて、遠隔で学習することは初めての取り組みであった。まず初めにオンラインの接続状況と授業方針を学校側と事前に確認することが必要であった。実際に使用するパワーポイントを用いて、Zoomでの打ち合わせを事前に学校側と1時間程度行った。

授業の流れとしては、Zoomでパワーポイントを共有し、授業を実施。カメラについては、パソコンの内蔵カメラと外付けカメラの2台を使用し、途中で何度かカメラを切り替え、所蔵資料を映し出し、道具の使用方法など実際の「もの」と同時に説明を行った。

コロナ禍の状況の中で懸念されたことが、生徒同士での考える時間、話し合いがどの程度可能かどうかであった。各学校により方針はことなるため、事前確認が重要であった。ほとんどの学校では、飛沫防止のため、授業中の会話は控えるという状況であった。考える時間や生徒の発表の時間、また質問事項については、事前に各クラス1名もしくは2名ずつなど、各学校の先生と事前に打ち合わせで決めておき、当日の発表者については担任の先生方にお任せをした。

2.3. 遠隔授業による授業の流れ

遠隔授業では、資料である「もの」を画面越しでみることになる。そのため、形状や材質、大きさや重さなどの伝え方も重要となる。またパワーポイントでスライドを映し出し、こちら側が説明をするだけでは資料館としての機能が発揮されないと考えた。

博物館展示教育は、「もの」である資料を媒体とする教育形態であり、文字による教科書を媒体とする学校教育や図書を基盤とする図書館教育とは基本的に異質なものである（青木1997）。パワーポイントによるスライドだけではなく、実際に「もの」の使用方法を動きとして映し出すこと、視覚だけでは読み取ることのできない情報を伝えること。これらを重要と考え、取り組んだ。

茨木市内にある小学校32校の内、遠隔授業を実施した学校は11校（全25クラス）であった。

「着る」と「食べる」の2つのテーマを用いて、実際に実物資料をカメラに映し出しだし使用方法などの説明を行ったのは、足踏み式ミシン、洗濯板、たらい、箱善であった(図1)。この中で洗濯をする道具、また牛のわらじの使用用途を考えるクイズを3択とし

授業内容 (パワーポイントを使用)	時間
【導入】挨拶・資料館の紹介	5分
【着る】・ミシン(実物の映し出し)説明 ・和と洋服装の説明 ・洗濯板、たらい(実物の映し出し)使用方法について3択クイズ ・アイロン(実物の映し出し)説明 ・わらじについての説明、牛のわらじについて3択クイズ	15分
【食べる】・食事について、かまど、はがま、おひつ、めしふごの説明 ・食卓のスタイルについて、ちゃぶ台の説明 ・箱善(実物の映し出し)説明	10分
【まとめ】・今と昔の違いについて気付いたことなど感想、質問等	5分

図1 授業のタイムテーブル

て出題、正解と考える番号に挙手をしてもらうなど、生徒に考える時間を設けることとした。またそれぞれの「もの」について発見したことや、今と昔の違いについて考える時間と発表時間を設けた。

3. 遠隔授業のメリット・デメリット

まずは、遠隔授業を実施した市内11校からいただいたアンケート結果についてみていこう。「子供たちもはじめて行うZoomの授業でとても前めりで聞いていました。昔の道具にも興味をすごく持っていたようで、「あれほしい!」など言っていました。」「クイズ形式にして頂いたので、子供たちも楽しく学習させて頂きました。」「子供たちも実際学校の近くにあるので行ってみたい!」と思いが強かったようです。(映像画面を通して)ミシンが下から出てくる時には「わあ、すごっ!」と声が出ていました。」といった意見があり、コロナ禍の状況のなかでも、連携事業を実施できたこと、また生徒の「昔のくらし学習」へ役立ったことが評価されている。

ただし、これは遠隔授業の選択肢のみであったことも影響している可能性がある。令和3年度は現在のところ、団体見学は中止しているものの、出前講座と遠隔授業を予定している。そこで、令和元年度の団体見学・出前講座、令和2年度の遠隔授業のみ、令和3年度の出前講座・遠隔授業の数の推移をみておこう。

令和元年度は団体見学12校、出前講座10校、令和2年度は遠隔授業11校である。令和3年度は出前講座16校、遠隔授業9校を予定していた

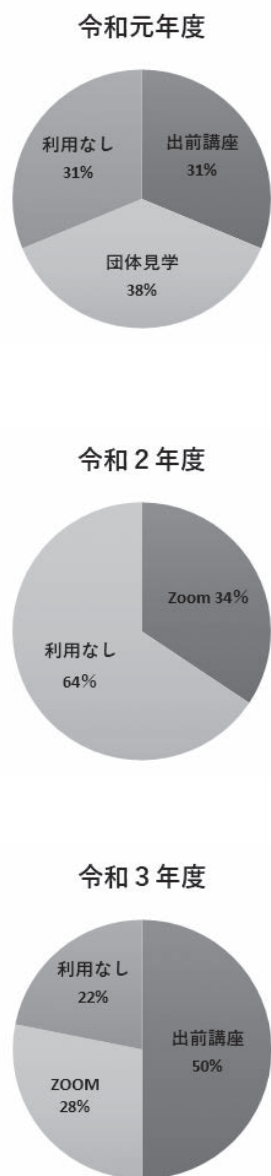


図2 茨木市内32小学校の利用割合

(註1)。

この推移からは、遠隔授業よりも出前講座、出前講座よりも団体見学の方が学校側からのニーズが多いことがみてとれる。このことは、実物を見る、もしくは触れるといったことが期待されているのだろう。実際に遠隔授業を行う中で、「もの」に触ることができない、またカメラ越しでの説明であることから、五感を用いた学習の場を設けることは困難と感じることもあった。

一方で、遠隔授業は実物を見る、もしくは触れることはできないものの、学芸員や生徒の移動を伴わず、コロナ禍のなかでも実施可能である点、それにも関わらず学校側では用意が難しい内容の講義内容を提供できる点、さらには資料を持ち出す、触るといった動作を経ないことから、民俗資料の保存という観点においても利点がある。今後、遠隔授業の利点と不可能な点を踏まえて、一つの選択肢として、事業の展開を図っていく必要があるだろう。

4. まとめ

博物館の利用は、学校とさまざまな施設との連携という今後ますます重要な課題を含んでいる。また触れる展示活用は、五感を用いて資料と向き合うという博物館独自の学びの特徴を有する。総合的な学習では、できるだけ五感を用いた学習の場を設定していくことが今後必要であろう。(今田ほか2003)

本稿では、毎年実施している「昔のくらし学習」について、コロナ禍の中で実施した遠隔授業という新しい試みを紹介した。様々な課題はあったものの、今回の遠隔授業の実施は、画面越しでの学び、また博物館と教育の場をつなぐ新たな機会となった。

また、上述したように、民俗資料の保存という点でも利点があった。民俗資料はほとんどが受入以前に、実際に使用されていた「もの」(道具)である。そのため受入時から劣化や破損が見られる資料も少なくない。出前授業において実物資料を持ち出す際、また触るといった動作に耐えられる資料を選定する必要が生じる。館外から「もの」を持ち出すことを必要としない遠隔授業は、民俗資料を保存しながら活用する上で、本館と本館の外をつなぐ大きな役割を果たすと考える。

一方で、やはり実物を見たい、実物に触れたいという学校側のニーズは高いことはみてきたとおりである。今後も所蔵民俗資料を整理し、適切な環境、保管状況を保ちながら資料保存を行うことで、展示はもちろんのこと、今後の学習の場における五感を用いた取り組みに耐えることができるよう資料の維持を行うことが重要である。

今回の新たな取り組みである遠隔授業における可能性も考え、これからの社会状況に応じて教育普及を連携とした資料活用に取り組んでいきたい。

註

1) ただし、一部の学校では、新型コロナウイルス感染症の拡大を受けて、変更を余儀なくされた。具体的には、出前講座の中止が3校、出前講座から遠隔授業への変更が1校、生じている(令和4年1月31日現在)。

参考文献(五十音順)

青木豊 1997『博物館映像展示論—視聴覚メディアをめぐる』雄山閣出版

今田晃一、手嶋將博、青木務 2003「学校教育における博物館の活用—国立民族学博物館の「触れる」展示資料を中心として—」『教育学部紀要』第37集 文教大学教育学部 pp.85-94